

— 周術期の効率化と医療安全の両立を目指して
— 麻酔科医に求められるものとは —

2025年

4月18日 **金**

12:00～13:00

●整理券の配布は行いません。

座長

合谷木 徹 先生
東京医科大学 麻酔科学分野

第2会場

ソニックシティホール
2F 小ホール 480席(予定)

演者

柴田 正幸 先生
日本赤十字社前橋赤十字病院 麻酔科



日本区域麻酔学会第12回学術集会HP
<https://square.umin.ac.jp/jsra2025/>

周術期の効率化と医療安全の両立を目指して — 麻酔科医に求められるものとは —

演者

柴田 正幸 先生

日本赤十字社前橋赤十字病院 麻酔科

近年、周術期医療における効率性の向上は、限られた医療資源の有効活用と患者満足度アップという観点から、その重要性がますます高まっている。本セミナーでは、周術期医療の効率化を目指す中で麻酔科医が果たすべき役割を様々な角度から再考し、その解決策を探りたい。

まず、周術期における効率化の鍵となる『周術期管理チーム』の構築とその運営方法について概説する。麻酔科医は、術前・術中・術後管理(疼痛管理)に一貫して関与することで、患者ケアの質を向上させてきたが、信頼できる『周術期管理チーム』の存在により、多くの業務をタスクシフトすることができ、麻酔科医はより重要な業務に集中できる環境を整えることが可能となる。

また、手術センターでは多くの診療材料を消費しており、病院全体に占めるウェイトはかなり大きい。診療材料を正確かつ効率的に管理することは重要であるが、それには多大な労力を要する。多くの施設では、診療材料の管理(請求や実績登録、在庫管理など)を手術センター看護師が担っているが、看護の本質から考えると優先順位は決して高くない。医療安全の観点からも、この業務のために費やしている時間を本来の看護に割けるような工夫が必要である。この課題に対し、我々の施設では、麻酔科医がリーダーとなり、RFID(Radio Frequency Identification)を活用した新しい物流管理システムを開発・導入した。この新しいシステムについても本セミナーで紹介する。

さらに、手術センターの効率化において、「迅速な麻酔からの覚醒」は、避けては通れない課題である。近年、環境問題について関心を集めたデスフルランは、発売当初より、覚醒の迅速性、嘔下機能の回復の速さ、術後悪心嘔吐の発生率の低さなど覚醒後の質の高さには定評があり、円滑な手術センター運営という側面からは非常に有望である。超高齢社会を迎えた日本では、その有用性はさらに高まると考えられる。今回は、原点に立ち返り、デスフルランの手術センターの効率化および医療安全への寄与について再検討したい。

最後に、特定看護師の働き方や麻酔科医とのかかわり方、実際のタスクシフトについて、我々の施設の実例をもとに紹介する。

効率化を進めるにあたり、医療安全的側面を軽視することは論外であり、効率化と医療安全の向上は相反するものではない。むしろ、バランスよく両者を推進することが肝要である。周術期、特に手術センター内の効率化には、手術センター看護師や多くのメディカルスタッフを巻き込んだチームアプローチが欠かせない。このチームの中で、麻酔科医はディレクション能力を発揮することが求められる。このディレクション能力こそ、21世紀における麻酔科医に求められているものではないだろうか。

本セミナーが、周術期医療の効率化と医療安全の向上を考えるみなさまの今後の活動の一助となることを願う。